

評価とハイテク (11)

教材というものの概念は前に述べましたが、学習指導要領には具体的な教材(教えるべき事象)は歌唱教材などでは各学年ごとに数曲ずつ示されています。この具体的な楽曲について 教材を教えるという立場と 教材で教えるという二つの立場があり、は題材構成、は主題構成という立場で学習指導案に展開されます。ピアノの教則本のハノンなどはどの曲をとってみても名曲とは言い難いのですが、名曲の演奏には欠かせない技術的要素を含んでいますので上達や技術維持には欠かせないわけです。その意味ではエチュードは典型的な 型の教材と言えます。ゆとり教育が叫ばれて教材の精選の結果必修教材が減少したのは本来週1~2時間の授業時間で効率よく基礎基本に関わる能力を学習させるねらいも有ったのですが、歌集的な色彩の濃かった音楽の教科書ではそれ程の研究もなくただ量的削減のみを行ったようです。

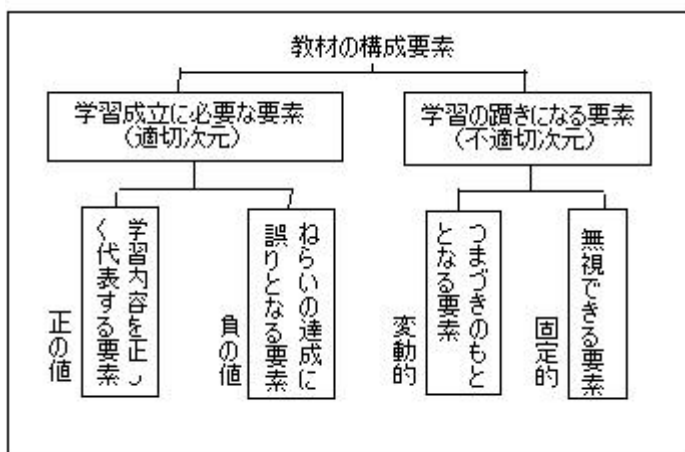
検証主義(実証主義)による教材選択

学習が確実に行われるためには確かな事実に基づいたことを教材とする立場をとることが必要です。まして真実に反する嘘を教えたり立証されていない仮説をそのまま真実として教えてはいけません。その意味で円周率を3として教えてしまうと円周率は整数なんだと誤った知識を持つ子供を生むでしょうし、およそ3として学習するのと3.14として学習するのはどちらも【およそ】としては似たようなものとして理解するであろうという前提に立っているわけで、そのことが理解されないと【つまづき】の原因を作ってしまうこともあるのです。昭和50年代に東京工業大学の坂本昂先生の研究室が教材の【次元分け】という画期的な手法を考案しましたが、現場の先生に浸透するには至りませんでした。この次元分けの手法は、学習内容を 学習の成立に必要な要素と 学習の成立につまづきとなる要素に分け、を適切次元と呼び、を不適切次元とする考え方で、適切次元をさらに

【正の値】(学習内容を正しく代表する要素)と【負の値】(ねらいの達成に誤りとなる要素)に分けます。

の不適切次元も【変動的】(つまづきの元となる要素)と【固定的】(無視でき要素)に分けます。

(以下概念図)



これを表にした例では次のようになります。

リコーダー学習の例

適切次元	正の値	負の値
持ち方	右手が下側	右手が上
くわえ方	唇を浅く当てる	噛む 漏れる
ト音の運指	●●● ○○○○ ●	左以外
以下略		

不適切次元	変動的	固定的
息の強さ	強すぎる、弱すぎる	
運指の方法	バロック式など	
笛の種類	C管・F管	材質・価格
楽器の機能	移調楽器と認識しない	

以下略

この表で適切次元の正の値こそが検証主義（実証主義）で選択される学習要素であると同時に、評価の対象となる行動目標なのです。言い換えれば次元分けという手順で学習指導案を組み立てない限り前号までで私が紹介してきた評価の方法は無効なのです。冒頭に評価項目を設定した学習指導案には未だにお目にかかったことは有りますが、本来【ねらい】や【目標】に向けて達成できたかどうかを評価で1きるように授業案はデザインされるべきです。

またかと思われるかも知れませんが、八調読みで楽譜を指導することは将来調性のスキーマを形成するときにもものすごく邪魔になるばかりか演奏は別として調性音楽の鑑賞や理解の能力形成に重大な悪影響を及ぼすことになります。12音すべてに固有の色があるとする指導では、【主音】の機能的色彩や導音、属音、下屬音などの音楽的機能は全く学習されないことになり、12音や無調の音楽だけのための概念であることに配慮が不足します。創造的音楽学習を唱えるジョン・ペインターですら機能と声や調感覚の大切さを力説しています。

機能主義による教材選択

あることを学習することによって、学習者が新しい体験や能力を身につける、いわば変容が起こることが学習の目的です。何曲レパートリーを増やそうが学習者には何の変容もない場合もありますし、目から鱗が落ちるたった一度の学習が大きな変容をもたらす場合もあります。

何れにせよ貴重な授業時数を使って行われる授業が子どもの変容をもたらさないような内容ならばそれは重大な事なのです。音楽の学習内容は数学や算数のように直線的な発達段階を仮定していませんが、どちらかと言えばスパイラルならせん構造に近いので気がつけば同じ所をグルグル回っているような状況になることが多いのです。それも、音楽の授業を退屈にさせている原因でもあります。「これを学習することによって○○の能力が形成される」というはっきりとした【効能】が必要なのです。移動ド学習には調性感を養うという機能がある反面調号が増えると読譜が困難になるという欠点があり、どちらかと言えばこの欠点を回避するために安易な八調読みが現場では蔓延しているのです。しかし、これを回避したままで放置することで「楽譜が読めない」「即興演奏ができない」「ハーモニーの付け方がわからない」といった致命的な後遺症が残ります。

操作主義による教材選択

せっかく検証主義、機能主義に基づいて教材を選択しても、それを実現する方法が無ければ絵に描い

た餅になってしまいます。目標に向けて最短距離を急ぐあまり、必ずしももっとも良い方法が選ばれているとは限りません。操作主義とはどんなに良い学習内容でもそれを学習する方法（操作）が存在していなければならないとする考え方です。フローチャートによるマスタリーラーニングも1つの方法でしょうが、学校を6年とか3年に限定して学年展開をしている現状では【落ちこぼれ】は必然的に生じ、ナングレードにでもして出来るまで卒業させないシステムでも出来ない限り実現できません。同じ14歳が方や大学院生、方や小学3年生では社会秩序や学歴観が大きく崩壊するでしょう。

直線上の1つだけの目標を持つリニアプログラミングに対して【段階】と【条件】という二つのパラメータで選択肢を分岐させオープンエンドに近いゴールを目指すというのが音楽学習には向いているのですが、そのことが評価を複雑にしてしまう原因にもなりますので頭が痛いのです。メソッドと呼ぶこの操作主義の展開は、教則本によっても異なりますし、楽器によっても異なります。近年コンピュータなどのハイテク機器をメソッドの補助や中核に据えた授業も多く見られますが、コンピュータだから実現できる世界を見失ったバーチャルな体験ばかりに目が向いた授業が多いのも実態です。トランスポーズ機能を使って移調体験させることで調の概念が著しく向上するなどの報告もありますので、そのようなハイテク利用も増やしたいものです。

行動主義による教材選択

学習した結果が【行動化】しなければならないとする考え方です。ここで言う行動は身体を動かす運動の事だけではなく、考えるや思うなどの内的行動も含まれますし、鑑賞領域の見えざる行動は殆どそれに当たります。どれだけたくさんの本を読んでもその結果を自分の生き方に反映出来なければ、読んだことがあるという【アリバイ】しか残りません。中高年層の多くは英語を習った事があるというアリバイはありますが、英語で会話をすることや英語でビジネスを展開する機会に乏しかったのに対して、今の子どもはネイティブの臨時講師から生の英語を聞き会話を体験することができますから、習ったことが行動化していると言えるでしょう。残念ながら音楽学習において学習成果が行動となるような授業は殆ど見受けられず、部活やお稽古ごとのみが結果を出しているようです。いまや風前の灯火状態の音楽科はこの反省をしないと生き残れないでしょう。

日本語や漢語できっちり表現できるのをわざわざカタカナ英語で言うのは行動化出来なかった英語の力不足を誤魔化しているのかも……